

年とったカシワの木のさいごの夢

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

矢崎源九郎訳

青空文庫

(クリスマスのお話)

ひろいひろい海にむかった、きゆうな海岸の上に、森があります。その森の中に、それは年とつた、一本のカシワの木が立っていました。年は、ちようど、三百六十五になります。でも、こんな長い年月も、この木にとっては、わたしたち人間の、三百六十五日ぐらいにしかあたりません。

わたしたちは、昼のあいだは起きていて、夜になると眠ります。眠っているときに、夢を見ます。ところが、木は、ちがいます。木は、一年のうち、春と夏と秋のあいだは起きていて、冬になつてはじめて、眠るのです。冬が、木の眠るときなのです。ですから、冬は、春・夏・秋という、長い長い昼のあとにくる、夜みたいなものです。

夏の暑い日には、よく、カゲロウが、この木のこずえのまわりを、とびまわります。カゲロウは、いかにも楽しそうに、ふわふわダンスを踊ります。それから、この小さな生きものは、カシワの木の大きな、みずみずしい葉の上にとまって、ちよつと休みます。そういうときには、心から幸福を感じています。

すると、カシワの木は、いつも、こう言いました。

「かわいそうなおちびさん。たった一日が、おまえにとつての一生とはねえ。なんとみじかい命だろう！ まったくもつて、悲しいことだなあ！」

「悲しいことですか？」と、そのたびに、カゲロウは言いました。「それは、どういうことなの？ なにもかもが、こんなに、たとえようもないほど明るくて、暖かくて、美しいではありませんか。あたしは、とつてもしあわせなのよ！」

「だが、たった一日だけ。それで、なにもかもが、おしまいじゃないか」

「おしまい？」と、カゲロウは言いました。「なにがおしまいなの？ あなたも、おしまになる？」

「いいや。わしは、おそらく、おまえの何千倍も生きるだろうよ。それに、わしの一日とというのは、一年の、春・夏・秋・冬ぜんぶにあたるのだ。とても長くて、おまえには、かぞえることはできんだろうよ」

「そうね。だって、あなたのおつしやることが、わかりませんもの。あなたは、あたしの、何千倍も、生きていますのですね。でも、あたしだって、一瞬間の何千倍も生きて、楽しく、しあわせに、くらしませすわ。あなたが死ぬと、この世の美しいものは、みんな、なく

なつてしまいますの？」

「とんでもない」と、カシワの木は、答えました。「それは、長くつづくよ。わしなどが考えることもできんくらい、いつまでも、かぎりなくつづくのだよ」

「それなら、あなたの一生も、あたしたちの一生と、たいしてかわらないわ。ただ、かぞえかたが、ちがうだけですもの」

こう言うとカゲロウは、また、空にはねあがつて、ダンスをしました。カゲロウは、まるで、ビロードと、しゃでできているような、自分のうすい、きれいな羽を、うれしく思いました。暖かい空気の中で、心からよろこびました。

あたりは、クローバの畑や、生垣の野バラや、ニワトコや、スイカズラのかおりで、いっぱいですし、クルマバソウや、黄花のクリンソウや、野生のオランダハッカソウなどのおいも、ぶんぶんしています。あんまり、においが強いので、カゲロウは、なんだか、ちよつと酔よったような気がしました。

長くて、美しい一日でした。よろこびと、あまい気持でいっぱいの一日でした。

お日さまが沈みました。カゲロウは、昼のあいだの、いろいろな楽しみのために、ぐつたりと、つかれを感じました。でも、それは、気持のよいくたびれでした。もう、羽が、

いうことを聞いてくれません。カゲロウは、ゆれている、やわらかな草のくきの上に、そつととまりました。ほんのちよつと、頭をこつくりこつくりさせていたかと思うと、すぐやすらかな眠りに、ついてしまいました。こうして、カゲロウは死んだのです。

「かわいそうになあ、小さなカゲロウさん！」と、カシワの木は、言いました。「あつというまの、みじかい命だったねえ」

夏のあいだじゆう、くる日も、くる日も、カゲロウは、同じダンスをしました。カシワの木と、同じことを話しあつては、同じことを答えあいました。そして、カゲロウは、いつも、同じ眠りにつくのでした。親のカゲロウも、子供のカゲロウも、孫のカゲロウも、みんな、同じことをくりかえしました。どのカゲロウも、同じように幸福で、同じように楽しんでいました。

カシワの木は、春の朝も、夏の昼間も、秋の夕方も、ずっと、目をさましていました。いよいよ、眠るときが、近づいてきました。やがて、夜の冬がやってくるのです。

もう、あらしが、うたいはじめましたよ。

「おやすみ、おやすみ。木の葉が散るよ。木の葉が散るよ。おれたちが、むしりとつてやるよ。むしりとつてやるよ。」

さあさあ、お眠り。おれたちが、歌をうたつて、眠らせてやるよ。ゆすぶつて、眠らせてやるよ。

どうだい。古い枝も、気持よさそうにしているよ。うれしくつて、ギシギシいつてるだろう。

ぐつすり、お眠り。ぐつすり、お眠り。おまえの、三百六十五日めの夜だよ。おまえはまだ、ほんとうは、一つの赤んぼうだよ。

ぐつすり、お眠り。雲が、雪を降らせてくれるよ。それは、やわらかい寝床になるよ。おまえの足もとをつつむ、暖かい、掛けぶとんになるよ。

ぐつすり、眠つて、楽しい夢をごらん」

そこで、カシワの木は、からだから、葉っぱの着物をのこらず、ぬいでしまいました。こうして、長い冬のあいだを、ゆつくり、休むことにしたのです。そのあいだに、夢もみました。カシワの木の見る夢も、人間の夢と同じに、いつもきまって、それまでに、自分の身に起つたことばかりでした。

このカシワの木にしても、一度は、小さいときがありました。いやいや、それどころか、ほんの小さなドングリを、ゆりかごにしていたこともありました。人間がかぞえたところ

では、この木は、もう、四百年近くも、生きていました。森の中で、いちばん大きくて、いちばんりっぱな木なのです。木の頂は、ほかの木よりもずっとずっと、高くそびえていました。海のはるかおきのほうからも、はつきりと見えましたので、船の目じるしになりました。けれども、カシワの木のほうでは、大ぜいの人が、自分を目じるしとしてさがしていようとは、夢にも知りませんでした。

高い、緑のこずえには、野バトが巣をつくり、カッコウが歌をうたいました。

秋になって、葉が打ちのぼされた銅板のようになると、わたり鳥もとんできました。わたり鳥たちは、海をこえて、とんでいくまえに、まずここで、ひと休みすることにしていました。

けれども、いまは冬です。カシワの木は、葉っぱをすっかりおとして、立っていました。ですから、枝が、どんなに、まがりくねつてのびているかが、はつきりとわかりました。大ガラスや小ガラスが、とんできました。カラスたちは、かわるがわる、枝にとまっては、「また、いやなときがはじまるねえ。まったく、冬のあいだは、食べものをさがすのがたいへんだよ」と、話しあいました。

この木が、いちばん美しい夢を見たのは、きよらかなクリスマスの晩でした。では、わ

たしたちも、その話を聞くことにしましょう。

きようは、お祭りだな、と、カシワの木は、はつきりと感じました。気のせいか、近所の町の教会の、鐘という鐘が鳴っているようです。それに、おだやかで、暖かくて、まるで、すばらしい夏の日のようです。

カシワの木は、生き生きとした、緑のこずえを、カブよくのばしました。お日さまの光が、葉と、枝のあいだに、ちらちらたわむれています。空気は、草や、やぶのにおいで、いっぱいです。色とりどりのチョウが、おにごっこをして、あそんでいます。カゲロウは、ダンスをしています。まるで、なにかもが、ただ、ダンスをして、楽しむために生きているようでした。

長い長い年月のあいだには、この木には、さまざまのことが起りました。いろいろなことも、見てきました。そうしたことが、まるで、お祭りの行列のように、つぎからつぎへと、目のまえを通りすぎていきました。

むかしの騎士^{きし}と貴婦人たちが、ウマに乗って、森を通っていきます。帽子には羽かざりをつけ、手にはタカをとまらせています。狩りの角^{つのふえ}笛がひびきわたり、イヌがワンワンほえたてました。

今度は、敵の兵士たちがあらわれました。きらびやかな服装をして、ぴかぴかの武器を持っています。やりだの、ほこやりだのを、手に手に持っているのです。兵士たちは、テントをはったり、かたづけたりしました。かがり火も、どんどんたきました。カシワの木の、ひろがった枝の下で、歌をうたい、それから眠りました。

今度は、恋人たちが、お月さまの光をあびて、静かな幸福につつまれて、出会っています。ふたりは、自分たちの名前の、さいしよの文字を、緑がかった、灰色のみきに、ほりつけました。

それから、だいぶたちました。あるとき、旅をして歩く、陽気な職人たちが、ことや、たてごとを、この木の枝に、かけたことがありました。それは、いまもまだ、そのまま、かかっている、美しい音をひびかせています。

野バトは、まるで、この木が心に感じていることを話そうとでもするように、クークー鳴きました。カツコウは、この木が、これからさき、まだまだ、たくさん夏の日をすごさなければならぬことを、うたいました。

そのとき、カシワの木は、あたらしい命が、からだじゅうを流れるような気がしました。下のほうの、一ばんほそい根から、上のほうの、一ばん高い枝まで、そうして、葉のさき

ざきまでも、流れるような気がしたのです。それにつれて、なんだか、からだか、ぐんぐん、のびていくような気がしました。根のさきの感じでは、たしかに、地べたの中にさえ、命と暖かみが、あるようです。力もついてきたような気がしました。カシワの木は、ますます大きくなっていききました。みきは、すすくく伸びて、どこまでもどこまでも伸びていきます。こずえは、ますますしげつて、どんどんひろがり、しかも、ぐんぐん高くなっていきます。――

木が大きくなるにつれて、幸福な気持も高まってきました。このまま、どんどん大きくなって、しまいには、光りかがやく、暖かいお日さまのところまでとどきたい、という、楽しいあこがれも、おこつてきました。

いよいよ、カシワの木は、雲の上よりも高く、そびえたちました。雲は、まるで、黒いわたり鳥のむれか、大きな、白いハクチョウのむれのように、下のほうを流れています。

カシワの木の葉は、まるで、一枚一枚が、目をもっているように、どんなものをも見ることができました。お星さまは、昼間でも、はつきりと見えました。とつても大きく、きらきら光っています。お星さまの一つ一つが、それはそれはやさしい、すみきった目のように、キラキラ光っているのです。それを見ると、カシワの木は、ふと、見おぼえのある、

やさしい目を思い出しました。子供たちの目や、木の下で会っていた恋人たちの目です。

ほんとうに楽しい、幸福にみちた瞬間でした。でも、こうしたよろこびを感じながらも、カシワの木は、こんなことを願いました。下に見える、森じゅうの木や、やぶや、草や、花が、みんな、わしと同じように大きくなって、このすばらしいかがやきを見て、いっしよに楽しむことができたならなあ、と。

ありとあらゆるすばらしい夢を見ていながらも、この堂々としたカシワの木は、まだ、ほんとうに幸福にはなりきっていませんでした。カシワの木は、まわりのすべてのものが、小さなものも、大きなものも、みんな、自分といっしよに、よろこびを感じないうちは、満足できなかったのです。こういう心からの思いをこめて、カシワの木は、枝や葉を、ぶるぶるつとふるわせました。ちょうど、人間が、胸をふるわすようにです。

カシワの木のこずえは、なにか、たりないものをさがそうとするように、しきりに、身を動かしました。

ふと、うしろを見ると、クルマバソウのにおいが、ぷーんとしてきました。つづいて、スイカズラとスミレのにおいが、それよりも、もっと強くしてきました。カツコウは、なんだか、自分の気持にこたえて、うたってくれているようです。

おや、森の緑の頂が、いつのまにか、雲の上まで、顔を出してきました。見れば、下のほうから、ほかの木も、自分と同じように、ぐんぐん大きくのびています。やぶも草も、高く高く、のびあがってきます。なかには、大いそぎで、のびようとして、地べたから、根までひきぬいてしまったものさえありますよ。なかでも、いちばん早く大きくなってきたのが、シラカバです。シラカバは、ほっそりとしたみきを、白いはずまのように、ぴちぴちとのびしてきました。枝は、まるで、緑色のしゃか、旗のように、波うって、ひろがりました。

こうして、森ぜんたいが、大きくなってきました。かつしよくの、わた毛のはえたアシまでも、いつしよにのびてきました。小鳥たちも、あとを追って、歌をうたいました。草のくきは、長い、緑色の、絹のリボンのように、ゆれていました。そのくきの上には、バツタがすわって、羽で、すねの骨をうっては、音楽をかなでていました。

コガネムシやミツバチは、ブンブンうなり、小鳥という小鳥は、歌をうたいました。なにもかもが、歌とよろこびにみちあふれました。それは、天までとどくかとさえ思われませんでした。

「しかし、あの水ぎわの、小さな、青い花も、いつしよに、大きくなってこなければいか

んな」と、カシワの木は言いました。「それに、あの赤いフウリンソウや、それから、小さなヒナギクもだ」

じっさい、カシワの木は、なにもかも、自分といっしよに、大きくならせなかったのです。

「わたしたちは、いっしよよ。わたしたちは、いっしよよ」と、うたう声が、そのとき、聞えてきました。

「それにしても、去年の夏の、美しいクルマバソウは、どうしたろう。——そうそう、その前の年には、ここは、スズランが花ざかりだった。——それから、野生のリンゴの木も、ほんとうに、きれいな花を咲かせていた。——ああ、何年も何年もあいだ、この森を美しくかざったものが、——みんな、いままで生きていたら、ここに、いま、いっしよにいられるだろうになあ！」

「わたしたちは、いっしよよ。わたしたちは、いっしよよ」という歌声が、今度は、さつきよりも高いところから、聞えてきました。いつのまにか、そんなところまで、高くとんできたようです。

「いや、これは、とても、信じられないほどの美しさだ！」と、年とったカシワの木は、

よろこびの声をあげました。「わしは、なにもかも、持っているのだ。小さいものも、大きいものも。忘れたものは、一つもない。世の中に、これほどの幸福が、あるだろうか、考えられるだろうか」

「神さまの天国では、ありますよ。考えられますよ」という声が、ひびいてきました。

カシワの木は、なおも、ずんずん大きくなっていきました。とうとう、地べたから、根が離れました。

「これ以上、うれしいことは、ないぞ」と、カシワの木は言いました。

「もう、わしをしばりつけるものは、なにもない。これから、この上ない高いところへ、光とかがやきの中へ、とんでいくことができるのだ。しかも、わしの愛するものは、みんな、いっしょなのだ。小さいものも、大きいものも。みんな、いっしょなのだ」

「みんな、いっしょに」

これが、カシワの木の夢だったのです。

ところが、こうして、カシワの木が夢を見ているあいだに、すさまじいあらしが、きよらかなクリスマス前夜に、海をも、陸をも、あらしまわっていたのです。海は、山のような大波を、岸にむかつて、たたきつけました。カシワの木は、メリメリツとさけて、根こ

そぎにされてしまいました。ちょうど、根が、地べたから離れる夢を見ていた瞬間にです。カシワの木は、地べたに、どつとたおれました。この木の、三百六十五年という一生は、カゲロウにとつての一日と、同じことでした。

クリスマスの朝になりました。お日さまがのぼったときには、あらしは、もう、すぎさつていました。教会の鐘という鐘が、おごそかに鳴りました。どの家のえんとつからも、貧乏なお百姓さんの家の、ちつぽけなえんとつからさえも、ちょうど、ドルイド教徒のさいだんからのぼる煙のように、かんしやをこめた、ささげものの煙が、うす青く立ちのぼりました。

海は、だんだんにしずまってきました。おきの、大きな船には、クリスマスを祝いする、色とりどりの旗がかかげられて、美しく風にはためいていました。この船は、ゆうべの、はげしいあらしにも、負けなかったのです。

「あの木が見えないぞ、年とったカシワの木が！ おれたちの目じるしだったのになあ」と、水夫たちは、言いました。「ゆうべのあらしで、たおれたんだ。あの木のかわりになりそうなものは、なにかあるかな。なんにもないなあ！」

カシワの木は、海べで、雪のふとんの上に、長々と、横になっていました。でも、いま、

みじかいけれども、こんなに心のこもった言葉を、お別れにうけたのです。

船の上からは、讃美歌さんびかが聞えてきました。クリスマスクリスマスのよろこびをうたい、キリストによる人間の魂たまごのすくいと、かぎりない命いのちとをたたえる讃美歌です。

うたえ、高らかに、世よの人よ。

ハレルヤ。主しゅは生まれたまひぬ。

このよろこびぞ、たぐいなし。

ハレルヤ、ハレルヤ。

なつかしい讃美歌は、空にひびきわたりました。船の上の人たちは、みんな、この歌をうたい、お祈りをしたおかげで、魂たまごが高められたように感じました。ちょうど、クリスマスクリスマスの前夜に、年とつたカシワの木が、さいごの、いちばん美しい夢ゆめのなかで、高められていったようにです。

青空文庫情報

底本：「マツチ売りの少女（アンデルセン童話集※【#ローマ数字3、1-13-23】）」新
潮文庫、新潮社

1967（昭和42）年12月10日発行

1981（昭和56）年5月30日21刷

入力：チエコ

校正：木下聡

2019年7月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作
られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

年とったカシワの木のさいごの夢

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 矢崎源九郎訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>